

3 カーネーションの据え置き（2年切り）栽培には養液土耕が有効

ねらいと成果

カーネーション栽培において、資材費に対する種苗費の割合は約45%と最も高く、経営の大きな負担になっている。そこで種苗費の削減と定植労力の軽減を目的に、1年間栽培した株を切り戻して2年目も使う据え置き栽培（2年切り栽培）について、養液土耕と慣行の液肥栽培を比較した。その結果、養液土耕による据え置き栽培は、慣行栽培より収量が増加し、品質も良好で、種苗費の削減と労力の軽減に有効であった。

内容

1 切り戻し

1年間栽培した品種「ノラ」を7月12日に、緑色の下葉が残るように、高さ30cmの位置で切り戻した。切り戻し後の欠株は認められなかった。

2 給液管理

カーネーション養液土耕かん水施肥プログラム（本誌No.114参照）通り、毎日給液した。慣行の液肥栽培は、養液土耕で与える液肥と同じ濃度で1週間分の量を毎週2回に分けて給液した。

3 収量

養液土耕では慣行栽培より総収量が15%増加した。特に4～5月の収量が多かった。また、通常の改植栽培と比較したところ、養液土耕では据え置き栽培が改植栽培より総収量は増加した。

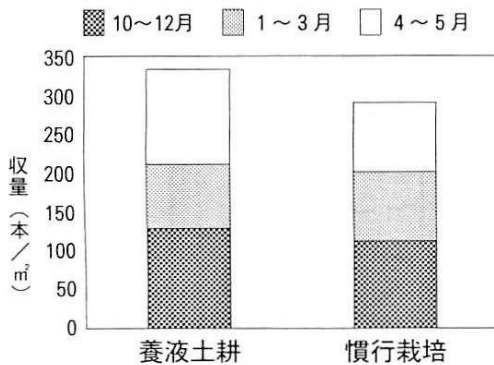


図1 据え置き（2年切り）栽培における養液土耕と慣行栽培の収量の比較
㎡はベンチ面積当たり

4 品質

両栽培法の1番花の品質は同程度であった。2番花は養液土耕が慣行栽培より切り花長が長く、切り花重が大きくなり、ボリュームのある切り花が得られた。

5 コストと労力

据え置き栽培により年間当たりの種苗費は半分となる。労力は前作の片づけおよび土壌消毒などの改植準備および改植作業が省かれる。切り戻し作業を考慮すると6～7月の労力が従来30%に軽減される。さらに、養液土耕により、かん水施肥が自動化されるため、栽培管理にかかる年間の総労力（収穫、出荷を除く）は60%になると考えられる。

今後の方針

据え置き栽培に適した品種の選定、仕立て方法の検討が必要である。

山中 正仁（淡路農技・農業部）

表 据え置き（2年切り）栽培における養液土耕と慣行栽培の切り花品質の比較

栽培方法	1番花		2番花	
	切り花長 (cm)	切り花重 (g)	切り花長 (cm)	切り花重 (g)
養液土耕	62.7	20.6	73.8	38.6
慣行栽培	61.2	21.8	71.6	34.1

1番花：摘心後（切り戻し後）伸長した分枝を採花したもの
2番花：1番花の採花後伸長した分枝を採花したもの

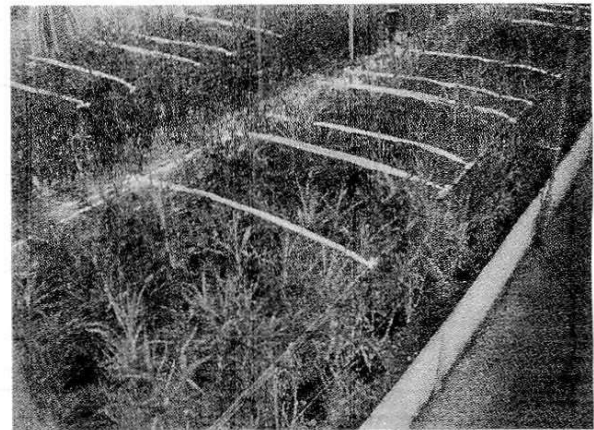


図2 切り戻し後の芽ふきの状況